

当報告の内容はそれぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors

第5回基幹研究「人類学におけるマイクロ-マクロ系の連関」公開セミナー 社会空間の人類学の可能性

日時：2011年1月21日（金）15:00-18:30

場所：AA研マルチメディアセミナー室（306号室）

発表者と発表題目：

1) 西井 涼子（AA研所員）

「憑依の社会空間—南タイの学校における出来事の生成をめぐって—」

2) 春日 直樹（一橋大学）

「人類学の静かな革命」—ストラザーン、ラトゥール、ヴィヴェイロス・デ・カストロを中心に検討する—

要旨：

1) 「憑依の社会空間—南タイの学校における出来事の生成をめぐって—」

西井 涼子（AA研所員）

2004年11月16日に、南タイの中学・高等学校で、4人の生徒が朝礼中に失神し、それがその後の一連の集団憑依事件の端緒となる。その後、痙攣を起こし、耳鳴りがする、近くに何かがいるように感じ、精霊が憑依したかのように泣き叫ぶ、胸が締め付けられて息ができず失神するといった症状を示す生徒が増え続けた。彼らは学校に登校すると憑依し、帰宅すると治るという症状が続いた。12月になると、ついにマスコミに事件はとりあげられるようになり、新聞やテレビの報道などでこの学校は全国に「憑霊する学校」として知れ渡るようになった。憑依事件は翌年2月によりやく収束した。

本発表は、この学校でおこった集団憑依という現象を、これまでの人類学における憑依をめぐる議論の前提であった非日常的な現象として日常的な生の場と対極的に位置づけることを問い直すことから出発した。憑依という現象には、とりわけ近代人類学が理性的人間の対極のありようとして関心を払ってきた。そうした憑依をめぐる議論はもっぱら「身体」と「こころ」といった二元論にかかわる主体性のあり方をめぐってなされてきたといえる。そこでの焦点は、現に行為する身体と、その主体の一致、不一致、二重性をいかに解釈するかということであった。ここでは、そうした従来の主観/客観、こころ/身体といった対立軸に還元して憑依現象を捉えるのではなく、さらにはモノと身体、人間と非人間、人間と自然といった対立軸の自明性をも問い直して考察をすすめる。そのために導入するのが、主体と客体、意図や非意図を超えて、さまざまな差異の

重層性から出来事が生成されるアクチュアリティを捉える「社会空間」という見方である。

「社会空間」とは、実践の場に展開している、異質な関係性や志向や行為の重層性・変容の過程を捉えることをめざす。それは、日常の営みの外にある客観主義的な構造やモデルといった全体を仮定することなく、インタラクションのなかで日常実践がつけられている内在的プロセスを捕らえようとする試みである。

憑依の「社会空間」においては、現場の流れを感受して行為が連鎖することにより、また土地神や水の精霊、その他の池や祠といった様々なモノがエージェント（アクター）として作用して、出来事が生成していった。ここでは、たんに人の相互行為だけではなく、モノ・環境が介在し、場の空気が作られ、出来事を生成していくプロセスがみられた。本発表は、こうした出来事の生成を社会空間として捉えることにより、憑依が生じるアクチュアリティを顕現する場であることを示し、生への新たな視角を拓くことをめざした。

2) 「人類学の静かな革命」—ストラザーン、ラトゥール、ヴィヴェイロス・デ・カストロを中心に検討する—

春日 直樹（一橋大学）

ストラザーン、ラトゥール、ヴィヴェイロス・デ・カストロらが中核となって推進してきた、現代人類学の「静かな革命」(Holbraad et als 2007:7)について検討する。この「革命」は、いわゆるポストモダン人類学が提起し残していった二つの課題を、特有のあり方で乗り越える。他者の表象化、およびこれを正当化する手段としての「リアリズム」という課題である。

ストラザーンは、人間とモノ、主体と客体、物質と精神といった従来の二分法を退けてしまい、これらを固定視して関係を検討するのではなく、反対にこれらを生成させ変換させる関係性について論じる。他方ラトゥールは、自然が普遍的であり科学によって解明されるべきという通念、社会や文化は記号やシンボルの世界として理解されるべきという通念、そして二つは別種の実践であるという通念をすべてしりぞける。彼に拠れば、法則も概念も信仰も、すべては人間やモノや人工物が混交的に関係しあう様式として成り立つにすぎない。

両者に関係するのは、人間と主体に対する徹底して関係論的な認識である。「徹底して」とは、人間以外のモノや人工物を同等な要素として組み入れる点で、さらに実在はこれらとの関係においてのみ成り立つと主張する点で、ゆえにリアリティとは関係の生成変化に等しいとする点において、ふさわしい言葉だからである。今日二人が揃って脚光を浴びだしたのは、この点がみいだされたことを意味しており、人間と現実に関する「存在論的転換」と形容されても不思議でない。

両者は「内在的」(immanent)なアプローチによって、他者の表象化もリアリズムも問題として成り立たなくしてしまう。ストラザーンの「メログラフィ」批判、ラトゥールの「(決し

てなっていない) 近代」批判は、ともに差異を外部に想定する前提をしりぞける。二人はそれぞれに、差異が内部を起源として外へと広がる様子を描き、かつ実体でも非実体でもなく、現実を構築するプロセスかつモメントであることを明らかにする。他者を外部に想定したり、リアリティの有無を論じる必要がなくなるのだ。

ラトゥールの分析がとる徹底した「対称性」、そしてストラザーンの議論を支える「部分的接続」と「水平的反響」(lateral reflection)は、ともに定点の喪失と表現できる。これに比べると、ポストモダン人類学以降の人類学の大半は、自然と文化(社会)、人間と非人間、主体と客体の二分法を当然の前提として受け入れるかぎり、いまだに超越的な視点を前提にしたまま、みずからの領域を定義づけている。よって「存在論的転換」は、「超越から内在への転換」と言い換えることができる。

こうした内在的な論述は、新しい様式としての批判を形成する。どんなアクターにも均等な視点を付与することによって、何がアクターとして活性化し他のどのようなアクターとつながるのかが考察できるし、ちょっとした細部の変化があり得たかも知れないつながりや生成可能かもしれない現実を喚起する。この論述においては、法則や因果関係のような非対称的な関係が実体化されることはなく、その関係がどのように作りあげられるのかが対称的に追跡されていく。そして、細部はみずからを基準として内側から差異を生成し、その差異をもって外部の差異とつながり、外側に向けてあたらしい現実をつくりだしていく。この論述は、外部ないし上方に視点を定めて真相を一義的に同定して日常の実践や経験の虚偽性を暴くという従来批判の対極において、あらためて展開されるべき批判のスタイルである。

「静かな革命」とは、細部に力を宿す人類学という学問の本領を、現実批判として発揮する運動だ、ということができよう。

- Henare,A.,M.Holbraad, and S.Wastell(eds)

2007 'Introduction.' In Henare,A. et als(eds). *Thinking though Things: Theorising Artefacts*

Ethnographically. London: Routledge.